

古里での夏休み

イズコ神父

6月の27日まで、休暇のために私は古里に帰ってきました。昔は、交通機関が難しく、交通費も高く、宣教師達は五年ごとぐらいに（その前は船で8年ごとに）休暇のため帰る習慣でした。私にもその経験があります。今の時代は、特に両親が生きている間、毎年でも2週間ぐらいの休みをとって、国に帰ることが出来ます。私の場合は、もう両親が他界しているので（母は103才で、8年前亡くなりました。）自分の国での休みの大きな理由は、6人の兄弟姉妹達の中で私は一番上ですので、皆と出会うことが大きな喜びです。それと共に、私の故郷の教会、教区、親戚、友達に会えることも喜びです。

8年前まで母はまだ元気に暮らしていました。2008年の10月17日に亡くなり、父も歳をとってその前に亡くなっております。両親に会うことが出来なくなってからは、国への私の帰郷も少し変わりました。兄弟が古里の家を守っていますが、それぞれ自分の家、自分の家族があるので休みの時かウイークエンドの時かしか使っていません。だから、私は、ヴァカンスに行く時、司祭達のレジデンスに泊まって、そこから親戚を訪ねるようにしています。

古里も私が日本にいる間（1972年から）ずいぶん変わりました。子供の時、故郷の村には800人ぐらいの人が暮らしていました。日曜日の二つのミサはいつも一杯でした。今は建物は取り壊されたものもあり、多くが残っていません。新しい家も建てられましたが、人口は非常に少なくなってしまいました。多くの方は町に住んでいて、祭りの時か休みの時だけ村に帰ります。それ以外、普段村に住んでいる人は200人にとどかないと思います。しかし、毎日そこに住んでいなくても多くの建物が大事に保存されています。

私の故郷の一つの特徴は松の木の繁った山の上にあるキリストの像です。昔からその場所に小さな教会がありました。1947年に村のすべての人たちの努力によってその教会の上にイエス・キリストの御心の大きな像が建てられました。毎年、12月の終わりごろ、村の人々は皆その山に登って荘厳にミサを捧げます。そこから南へ目を向けるとピレネー山脈がよく見え、北の方に向けて、広々としたブドウ畑や麦畑が見えます。そして、祈るように自然から招かれています。

この小さな古里から日本を訪れた人はおおよそ40人程おられます。彼らは30年ほど前に日本に来て、私と一緒に東京、京都、姫路城などに行きました。まだ私は姫路のことをあまり知らなかったのですが、案内をしていろいろと説明もしました。

今年の7月の3日（日曜日）、姫路教会の三人の信者さんと一緒に故郷の教会のミサにあずかり、皆と一緒に信仰を分かち合う大きな喜びを経験しました。そしてミサの後、日本に来たことがある友達が、美味しいごちそうを準備して下さいました。役場の中で楽しい時間を過ごすことができました・・・もちろん、スペインへの旅行はこれだけではありません。ル

ルドにも、トレドにも、マドリッドにも行っていい思い出が多く出来ました。でも、古里のことは特別です・・・。